詩集

別れの準備

藤本直規

花神社

詩集

別れの準備

藤本直規

花神社

著者
藤本直規（ふじもと・なおき）
1952年生れ
「言葉」「藪の中」同人
既刊詩集　『解体へ』『マリーヌ』
住所
滋賀県大津市螢谷７番33号（〒 520）

＊詩集　別(わか)れの準備(じゅんび)
1988年10月27日　初版第１刷　　1989年３月28日　第２刷
定価 1800円
著　者　藤本　直規
装　丁　熊谷　博人
発行人　大久保憲一
発行所　株式会社花神社(かしんしゃ)
東京都千代田区猿楽町2—2—5　興新ビル605　〒101
電話　東京・291・6569　振替　東京 2—194949

印刷・工友会印刷所
製本・松栄堂　用紙・文化エージェント
0092—880131—1092

© NAOKI FUJIMOTO
Printed in Japan

詩集　別れの準備　＊　目次

I

死者の部屋から帰った夜に——8
綿をつめる——12
夜中に爪を切る——16
骨を噛む——20
胡桃割り——24
午前零時——28
別れの準備——30
自動改札機——34
帰路——38
骨が腐る——42
夢の残骸——44
頭突き——48

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II

アダムの顎骨——52
情死——56
ETよ　こんにちは——60
非行——64
太陽が昇りきるまで——68
夜の海にて——72
パン焼き職人——76
自転車に対する愛——80
自動販売機——84

跋　大野　新——86

別れの準備

I

死者の部屋から帰った夜に

弛緩した肉体の秩序を整え
穴という穴の残り香を消し
その穴を綿で塞ぐ

さ迷い出る魂があるとすれば
去らば去れ
そっと逃がしてやろう

両腕で彼の背中を抱きあげて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

真新しい寝巻の袖に痩せた腕を通してやると
魂の抜けた肉体はその分だけ重くなるのか
私の肩は抜けるように痛い

それから襟元をそっと直し　薄化粧をする
秘めた逢瀬の前のように
最後に念入りに淡い紅をひくと
死者は滞りなく死に終えることができる

肉体の終わりは天使のように可憐に美しく飾ってやろう
黒土の褥の上で墓守が激しく恋をするだろう
死体処理セット一式
天使（エンゼル）セットと呼ばれている

出棺を待つ
のは　生者なのか　死者なのか
生者にも　死者にもわからない
ただ薄く紅をひくだけで
た易く生き終えることができたらと
女たちは化粧しながら思う

死者の部屋から帰った夜は
冷めた夕食を黙々と食べた後で
苦い消化薬を飲みほし
画像の消えた二十インチT・V・受像機の
走査線の煌きの中で
今夜は何故か薄化粧して眠る妻を
墓守のように欲情して抱いた

綿をつめる

小さな蛇に鷲鳥の卵が飲み込まれるように
驚くほど多量の綿が飲み込まれてゆく
入りきらない分は丸めたまま割箸で押し込む
無理をしてはいけない
消化不良をおこす訳ではないが
粘膜を傷つけてしまわないように
半分開いた歯の隙間から綿をつめる
鼻翼が変形してしまうまで
鼻腔にも押し込む

分泌物を防ぐために
耳の穴にも少し
細い竹で押し込む

もう何も聞こえない
（本当のことは何も聞いたことがなかったけれど）

最後に最も肝心な手順だが
肛門にも綿をつめる

おお
死者の弛緩した管腔の中へ
際限なく綿が飲み込まれていく
排泄するあらゆる穴を塞ぐ

それは死者を送る儀式のようではあるが
本当は生者は
死者の穴という穴を恐れているのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com